

## 『忠度集』の歌語「人かずにあらぬ」について

瀬 良 基 樹

## はじめに

古代和歌においては、自己の行きなずむ人生から生じる身の憂さを嘆く歌が万葉以来多く見られる。世の中の階層化が進み、貴族社会が確立する平安中期になると、その数は急増していく。ここでは、『忠度集』に一例出てくる歌語「人かずにあらぬ」を取り上げながら、それが特徴的に見られる『万葉集』『うつほ物語』『源氏物語』の用例を検討し、その表現効果を考察してみようと思う。

なお、使用した本は、八代集は『新日本古典文学大系』、『万葉集』『うつほ物語』『源氏物語』は『新編日本古典文学全集』、私家集等の和歌は『新編国歌大観』、漢文は『新釈漢文大系』によった。

## 一

『忠度集』に、「除夜」の題で、  
人かずにあらぬをなげく我が身さへはるとあすよりはあふべ

きかは

(冬、六〇)

という歌がある。一人前の人として数えられるような人物でないことを嘆いている自分自身までも、春だと明日から祝うべきであろうかという意味で、世間の人並みでない零落した自分の境遇を、「人かずにあらぬ」と表現している。

題については、『和漢朗詠集』では「歳暮」が用いられ、『堀河百首』には「除夜」の題が設けられている。「歳暮」の題の歌は、漢詩の影響もあつて、年の終わりになって老いが増すことへの嘆きを詠んだものが多い。「除夜」の題の歌は、時代的に早い例として、

讃岐院位の御時の百首に、除夜を

あすよりははるとおもはぬけふならばくれ行くそらをいかに  
をしまむ (教長集、冬歌、六三六)

とあるように、除夜と新春を対照させながら、月日の経過に対する愛惜の情や新しい年への期待感を詠んだものが多く見られる。それに対して忠度の歌は、「人かずにあらぬ」として「除夜」

を結び付けている点で特異である。このような歌は多くない。

## 歳暮の心をよめる

かずならぬ身にさへ年のつもるかな老は人をもきはざりけり  
(詞花集、巻四冬、一五九、成尋法師)

## 歳暮ノ述懐といへる心をよめる

かずならぬ身にはつもらぬ年ならばけふのくれをもなげかざらまし  
(千載集、巻六冬歌、四七二、惟宗広言)

## 歳暮

数ならであるにもつもの月日かな人にもよらぬとしのくれとて  
(宝治百首、冬十首、二三八三、為繼)

成尋法師の歌は、ひとかどの人物として認められず世の片隅に埋没して生きている自分までも避けることなく、総ての人に平等に訪れる老年を嘆いており、惟宗広言の歌は、年が増すことは世間から問題にされない存在だからといって自分をも無視することがないという辛さを痛感しており、為繼の歌は、月日に加わることはその人の存在価値や生き方とは無関係に総ての人に普遍的に訪れるものだということの世の理法を実感している。

忠度の歌は、成尋法師の歌を本歌としながら、歳暮における奇なる年波への嘆きを直接表面に出さないで、除夜における「人かずにあらぬ」ことへの悲哀感と新春を寿ぐ心情との矛盾を中心に歌っている。新春を迎えることへの慶祝感よりは、現在の自分の不遇な状況への嘆きを主にしている。

## 二

次に、『万葉集』の「数にもあらぬ」を用いた歌を見てみよう。集中には三例出てくる。「倭文たまき」が枕詞として「数にもあらぬ」に掛かるものが二例(六七二、九〇三)、「塵泥の」が枕詞として「数にもあらぬ」に掛かるものが一例(三七二七)である。他に、「倭文たまき」が枕詞として「賤しき」に掛かるものが一例(一八〇九)あり、これも取り上げよう。

(一)倭文たまき数にもあらぬ命もてなにかこどく我が悲ひ渡る  
(巻四、六七二、安倍朝臣虫麻呂)

「倭文たまき」について『時代別国語大辞典上代編』は、「枕詞。珠などを手纏に飾る貴人に対して、賤しい者は倭文の布を手纏とするとところから、数ニモアラヌ・賤シキにかかる。」と説明し、「倭文」についても、「(名) 日本古来の織物。文様を織り出したもので、舶載のアヤに対し「倭文」の文字で表記される。袴・麻・苧などの横糸を染めて交織したものである」と述べている。「手纏」は、玉や貝などを紐で通して臂の辺りに巻いた、上代の装身具のことである。

この歌の「命」は身と同意で、「倭文たまき数にもあらぬ命」とは、卑賤な自分の身分のことを言っている。青木生子氏は、この歌が注記がなくて「濃厚な恋情表現の体をなしている」のに「どちらかというに、いわゆる純然たる男女相思の歌とみない」のは、

坂上郎女が親族の虫麻呂や駿河麻呂らと、「宴席の戯歌」や「同族親愛の起居相問」の歌を作る間柄であったからだとされる。坂上郎女の母と虫麻呂の母は、同居の姉妹であった（六六七の歌注）。

結局この歌は、虫麻呂が自分を低めて身分の高い女性に見立てた坂上郎女を恋慕する「戯歌（ふざけた、遊びの歌）」として詠まれている。このように、身分の低い者が高貴な人に恋する歌として、『万葉集』には次のような例がある。

#### 山に寄する

岩疊恐き山と知りつつも我は恋ふるか並ならなくに

（巻七、一三三二、よみ人知らず）

（二）倭文たまき数にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも

（巻五、九〇三、山上憶良）

「倭文たまき数にもあらぬ身」とは、人並みでない身分の低い自分のことを言っている。この歌には神龜二年作の注があり、当時憶良は位はあっても官職には就いていなかった。

この歌の「千年にもが」は、九〇二の歌、

水沫なすもろき命も袴繩の千尋にもがと願ひ暮らしつ

の「千尋にもが」と意味的に通じている。また、九〇一の歌、

荒袴の布衣をだに着せかてにかくや嘆かむせむすべをなみの「荒袴の布衣」は、九〇〇の歌、

富人の家の子どもを着る身な腐し捨つらむ純綿らはも

の「純綿」と対照的に用いられており、自分が沈淪した下賤な人物にすぎないことを強調している。

ところで、芳賀紀雄氏は、九〇一の歌の「布衣」について、九〇〇の歌の「富人」が「漢語」「富人」の訓読語だとする『日本古典文学全集萬葉集』の説を肯定しながら、「布衣」の語も、「富人」と同じ様相を呈し、やはり訓読語と認められる。」と述べておられる。

漢語の「布衣」には、次のような意味がある。

（ア）一般庶民の着る麻や綿製の衣服。

布衣不<sub>レ</sub>完、疏食不<sub>レ</sub>飽、蓬戸穴腐、日孜孜上<sub>レ</sub>仁、知<sub>レ</sub>我。

（大戴礼記・曾子制言中）

（イ）無官の庶民。

臣本布衣、躬耕<sub>二</sub>於南陽<sub>一</sub>、苟全<sub>二</sub>性命於亂世<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>聞達於諸侯<sub>一</sub>。

（文選・諸葛亮「出師表」）

そして、「布衣」はしばしば不遇な存在であった。

古之賢人、賤爲<sub>二</sub>布衣<sub>一</sub>、貧爲<sub>二</sub>匹夫<sub>一</sub>。（荀子・大略篇）

九〇三の歌の「倭文たまき数にもあらぬ」という表現も、この「布衣」の（ア）と（イ）の意味を踏まえた造語であろう。

この歌の「千年」の命への願いは、憶良が「文選」の「古詩十九首」の第十五首の「生年不<sub>レ</sub>滿<sub>二</sub>百<sub>一</sub> 常懷<sub>二</sub>千歲憂<sub>一</sub>」を引きながら、「沈疴自哀文」の中で、「千年の愁苦、更に座後に繼ぐ。」と述べている所にも見られる。結局憶良は、八九七の長歌の六首

の反歌に見られるように、老病（八九八、八九九）と貧窮（九〇〇、九〇一）の身で、子供達の行く末を思い、長寿を願っている（九〇二、九〇三）。

（三）塵泥の数にもあらぬ我故に思ひわぶらむ妹がかなしき

（卷十五、三七二七、中臣朝臣宅守）

人数に入らない私のために落胆しているであろうあなたがいとしいことよの意である。

「塵泥」については、頭昭が、「ちりひぢとは塵泥と書也。ちりとひぢと二の物也。」と説明している。この歌の「塵泥」は漢語「塵泥」の訓読語として用いられている。

漢語「塵泥」の意味は、

（ア）塵と泥。管見では、『漢語大詞典』のあげる次の例が時代的に早いものである。

存者無二消息一、死者爲二塵泥一。

（杜甫「無家別」）

（イ）塵や泥のように役立たないもの。

應憐泣楚玉 棄置如塵泥 （孟郊「鴛路溪行呈陸中丞」）

小臣蹤迹本塵泥 登科曾賦二御前題一 屈指方經二五六載一  
如今已上二青雲梯一 位列二諫官一無二一語一 自愧將二何報二  
明主一 應レ制非才但淚垂 強作二狂歌一歌二舜禹一

（王元之「觀三聖上親試二貢士二歌」）

北宋の王元之（王禹偁）は、「塵泥」を卑しい身分（庶人）の意味で使っている。

なお、和語としての「塵泥」は、『古今集』仮名序に、「高き山も、麓の塵泥より成りて」と塵と泥の意味で使われたり、「うつほ物語」藤原の君の巻に、兵衛の言葉として、「かかる聞こえあらば、兵衛が身は、何の塵泥にかならむ。」と、取るに足りないつまらないものの意味で使われたりしている。

この宅守の歌の「塵泥」も、卑賤であることの意味で使われている。この歌は、宅守が越前に配流されて旅立った後に、都に残っている妻の狭野弟上娘子を思いやって詠んだものである。宅守の流罪の時期については、土橋寛氏が、「宅守が越前に流された時期は分らないが、天平十二年（七四〇）六月の大赦に除外されているから、それ以前の近い時期だったのであろう。」と述べておられる。宅守が自分のことを「塵泥の数にもあらぬ我」と卑下して言ったところには、弟上娘子との愛を引き裂こうとする、流罪という不遇な運命を全身で引き受けようとする姿勢が認められる。

（四） 菟原処女が墓を見る歌

……我妹子が母に語らく倭文たまき賤しき我が故ますらをの  
争ふ見れば生けりとも逢ふべくあれやししくし黄泉に待  
たむと…… （卷九、一八〇九、高橋連虫麻呂）

ここでは、「倭文たまき賤しき」は、菟原処女の二人のますらを、千沼壮士と菟原壮士に対する謙称として用いられている。  
以上のように、「倭文たまき数にもあらぬ」、「塵泥の数にもあ

らぬ」という表現は、單なる謙称として用いられたものではなく、そこには自分は人数に入らない存在だと卑下する姿勢が認められる。安倍虫麻呂は高貴な女性に対する身分の低い自分を、憶良は庶民として在野にある自分を、宅守は流罪に処せられた自分を、それぞれ対象化して捉えている。安倍虫麻呂は播磨守となり、従四位下で没している。山上憶良も従五位下を賜り、伯耆守や筑前守となっている。また中臣宅守は赦免されて帰京後従五位下となり、さらに神祇大副も歴任している。このように、彼等は身分や地位には相当のものがあつたにもかかわらず、このような自己の把握の仕方をしているところに、律令的な官人体制と結びつけて自己を位置づけようとする姿勢がうかがえる。

### 三

『うつほ物語』祭の使の巻における、懸想人達のあて宮に対する五度目の和歌群にも、「数ならぬ身」の表現が繰り返される。

あて宮に和歌を贈った四人の貴公子のうち、左大臣の子息で宰相の実忠は、「数ならぬ身を思ひたまへ知らぬやうなるがかしこきに、聞こえさせじと、かへすがへす思つたまふれと」、あて宮を思うあまり病氣になり、このまま死ぬのも惜しいと考えて、病床からあて宮に宛てて恋い死にの辛さを訴える便りを送る。

また、兵衛佐で内蔵頭くわのかみの行政も、

数ならぬ身をはつ秋のわびしきは時雨も色に出でぬなりけり

と詠んで、忍ぶ恋の苦しさを嘆く歌をあて宮へ贈る。この歌は、「はつ」が「恥づ」と「初」の掛詞となっている。「色に出づ」は、木の葉が紅葉することと恋情が表情に出ることの両意が掛けられている。「数ならぬ身」という表現は、実忠の場合は散文、行政の場合は和歌の中で使われ、両者は融合し合つて身分違いの恋のもたらす悲哀感を高めている。

このように、実忠や行政が高貴な身分でありながら、自分を「数ならぬ身」と卑下して言っているのは、あて宮のより一層の貴種性を印象づけるためでもある。あて宮は嵯峨の院の第一皇女と左大将正頼との間に生まれた九女で、皇室の血を引いていた。さらに、あて宮は東宮妃として入内する運命にあり、実忠や行政の自己を低めた把握の仕方は、その伏線ともなっている。

四人の懸想人のうち、涼は、

数知らぬ身よりあまれる思ひにはなぐさの涙のかひもなきかな  
と自分の理性では抑え切れない恋情の強さを詠み、仲澄は、

寝る間なく嘆く心も夢にだに会ふと思へばまどろまれけりと「夢中会恋」の趣を歌つて、共に日夜あて宮に心身共に奪われている様を訴えるが、実忠や行政はあて宮を恋慕する心を「数ならぬ身」が遮ると言つて、身と心が分裂して遣る瀬ない思いでいる様子を告白している。

『うつほ物語』は、元々摂関政治が確立していく時期にあつてそれに批判性を持ち、「天皇を中心とした律令官僚制度を理想とす

る律令官人的な意識」を反映させようとしたものであったが、祭の使の巻における「数ならぬ身」の表現は、東宮妃として入内し、「藤原の君と聞こゆる一世の源氏」正頼に天皇の外祖父としての地位を築かせる絶世の美女あて宮に對して、貴公子達が自分を卑下して使っている。

#### 四

『源氏物語』の和歌において、「数ならぬ身」（「数ならぬ伏屋」、<sup>よせや</sup>）「数ならで」の形も取る）の抽象化された表現を用いるのは、「雨夜の品定め」において話題となった中の品の女性である空蟬を筆頭に、明石の君、玉鬘、紫黒（玉鬘の歌の代作）、落葉の宮、蔵人少将、小宰相の君等である。次にその歌をあげてみよう。

（一）<sup>帯木</sup>の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな

（帯木の巻、源氏）

数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帯木

（空蟬）

源氏の歌の本歌は、

そのはらやふせやにおふるははきぎのありとてゆけどあはぬ

君かな（古今和歌六帖、第五、三〇一九・新古今集、卷十

一恋歌一、九九七（四句は「ありとは見えて」、坂上是則）

で、姿は見せながら源氏に会おうとしない彼女は、源氏には気位の高い女性に見える、強い印象を与える。

空蟬の返歌は、是則の歌の地名の「伏屋」を粗末なみすばらしい家の意味にとり、「帯木」を自分に喩えて自分が受領階級の出身であることを明らかにして、源氏との身分の違いを嘆き、彼に心を引かれながらも、彼への愛着を断ち切るうとしていた。

（二）海松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめいかにわくら

（澤標の巻、源氏）

数ならぬみ鳥がくれに鳴く鶴を今日もいかにととふ人ぞなき

（明石の君）

源氏の歌の「あやめ」は「文目（物事の筋道）」と「菖蒲」を、「いか」は「如何」と「五十日」を掛け、「海松」は海草のみるを意味して姫君を譬えており、「かげ」は海中の暗い所、岩陰のことを言っている。源氏は自分の流謫の形見であり将来后となるべき姫君にふさわしく生後五十日目の今日を祝おうとして、姫君の成長のために心を砕いている。

明石の君の歌の「み鳥」は明石の君を、「鶴」は姫君を譬えている。「み鳥がくれ」という語は、勅撰集では「新勅撰集」に初出する。『紫式部集』には、

なくなりし人のむすめの、おやのてかきつけたりけるも

のを見て、いひたりし

ゆふぎりにみしまがくれしをしのこのあとをみるみるまどはるるかな

（四二）

とあり、この語は歌語「み山がくれ」を「海松」（ここでは海辺の



松の意」ととの縁で言った作者の造語であろう。「み山がくれ」という語は「古今集」に初出するが、鳥と結びつけて詠んだものとして、「後撰集」に次のような例がある。

得がたかるべき女を思<sup>おも</sup>かけてつかはしける

数ならぬみ山隠れの郭公人知れぬ音をなきつゝぞふる

(巻九恋一、五四九、春道の列樹)

「み鳥がくれ」は鳥陰に隠れていることを言い、不遇さを象徴している。

明石の君の返歌は、自分が明石の前司の娘という「数ならぬ身」ゆえに、明石に留まったまま源氏に顧みられない自分達親子の不運な宿世を嘆いている。

(三)みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえに  
は深しな  
(源氏の巻、源氏)

数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめ  
けむ  
(明石の君)

源氏の歌は、「身を尽くし」に「落標」、「えに(縁)」の「え」に「江」を掛け、「しるし」「え」「深し」は「落標」の縁語となっている。絶望的な恋の激情を歌った源氏の吟誦する元良親王の「いまはた同じ難波なる」の歌を本歌とし、明石の君との偶然の出会いに二人の宿縁の深さを感じ取っている。

明石の君の歌は、「何は」と「難波」、「甲斐」と「貝」、「身を尽くし」と「落標」を掛けており、「貝」「落標」は「難波」の縁

語である。源氏の歌と同じく元良親王の歌を本歌としながら、「数ならぬ身」の憂さを訴えるとともに、今まで父の明石の入道の意を受けて都の貴人との出会いを求めて毎年恒例の住吉詣で行ってきた、この馴染みの深い難波の地で、源氏の自分に対する深い愛情を汲み取ったことに心の慰謝を感じている。

(四)知らずとも尋ねてしらむ三島江に生ふる三稜のすぢは絶え  
じを  
(玉鬘の巻、源氏)

数ならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかく根をとどめけむ  
(玉鬘)

源氏は玉鬘が六条院で貴公子達と交際するに足る教養の持ち主かどうか知りたくて、彼女に歌を贈っている。「三稜」は淡水の浅い所に生える地下茎を持つ多年草で、『一条摂政御集』にも、

おほんとの、きたのかたきこえたまけるに、御かへりな  
しとて

つくまえのそこひもしらぬみくりをばあさきすぢにやおもひ  
なすらん  
(六五)

と、「すぢ」の多いものとして詠まれている。源氏は、玉鬘の父の内大臣とは義兄弟で、玉鬘も全くの他人とは言えず深い縁があると告げている。

玉鬘の歌は、源氏の玉鬘とは深い結び着きがあるという呼び掛けには直接答えないで、人数に入らないこの身はどんな血統からこの辛い世に生まれてきたのだらうと言って、筑紫で数奇な運命

に翻弄されながら生きてきた我が身の憂さを思い返している。

「三稜」の根を詠んだ歌は、『古今和歌六帖』にも、

こひすてふさやまのいけのみくりこそひけばたえすれ我やね  
たゆる  
(第六、三九五五、よみ人知らず)

とあって、「三稜」は沼や池に生育するものとされた。本来「三島江」に生えるものは、薦(「万葉集」)や葦(「拾遺集」)であり、「三島江に生ふる三稜」は、六条院という高貴な人々の住まいに、田舎じみて不似合いな姿で現われた玉鬘を象徴している。

(五) おなじ果にかへりしかひの見えぬかないかなる人か手に  
きるらん  
(真木柱の巻、源氏)

果がくれて数にもあらぬかりのこをいづ方にかはとりかへす  
べき  
(鬚黒大将)

多くの求婚者の中で、玉鬘が選んだ相手は鬚黒だった。玉鬘の結婚後も源氏は彼女のことが忘れられず、度々便りをする。

源氏の歌は、「卵」に「効」を掛け、同じ我が家で育ったあな  
たが見えないのは、誰が捕らえているのだろうかと言つて、鬚黒  
が玉鬘を一人占めにして、自分の所へ顔を出させないことを恨ん  
でいる。

玉鬘は、親の立場を利用して自分の関心を引こうとしている源氏の歌を読んで鬚黒があてつけがましく言うので、返歌を躊躇している。それを見た鬚黒は、源氏の父親面をした仮面を剥ぎ、こうとして、玉鬘の返歌の代作をする。「仮の親(養父)」の源氏に育て

られた玉鬘のことを、「鴨の卵」に掛けて「仮の子」(『新日本古典文学大系源氏物語』の指摘するように「養女」の意味)と言い、嫡出子でないので「数にもあらぬ」と表現している。家の片隅にいて目立たない正妻の子でない者を、どこに誰が隠すだろうか、と鬚黒は源氏に反論している。

(六) 契りあれや君を心にとどめおきてあはれと思ふうらめしと  
聞く  
(夕霧の巻、致仕太政大臣)

何ゆゑか世に数ならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしとも聞  
く  
(落葉の宮)

下廊の更衣の一条御息所を母とする朱雀院の第二皇女である落葉の宮は、柏木と結婚するが、彼の死後夕霧に言い寄られる。御息所の亡くなった後彼は宮と同棲する。雲居雁の父致仕太政大臣は、宮を恨んで歌を贈ってくる。下の句は、落葉の宮が今は亡き息子柏木の妻である点に同情し、娘の夫夕霧を奪った点を非難している。

宮の歌は、下の句に大臣の歌を踏まえている。「数ならぬ身」とは、宮の今では母を失つて後ろ盾が全くない落魄した状況を、致仕太政大臣を父に持ち威勢の盛んな雲居雁の境遇と比較して言っている。

(七) いでやなぞ数ならぬ身にかなはぬは人に負けじの心なりけり  
わりなしやつよきによらむ勝負を心ひとつにいかまかす  
(竹河の巻、蔵人少将)



(中将のおもと)

あはれとて手をゆるせかし生死を君にまかすわが身とならば

(少将)

夕霧の息子の藏人少将は、玉鬘の娘大君に好意を持っていたが、大君は結局多くの求婚者の中から冷泉院へ参院することになり、なおもあきらめきれない少将は、大君付きの女房の中将のおもとを相手に、恨み言を述べる。

この三首の贈答歌は、大君が妹の中の君と碁を打つ姿をかいま見た少将が大君への恋情を一局暮らせた場面と結びつけて、「数」「負け」「つよき」「勝負」「手をゆるせ」「生死」といった碁の縁語を巧みに使って二人の心情を表現している。まず少将が、「数ならぬ身(ここでは、冷泉院という皇族に対して身分の劣る少将の地位)」だが負けじ魂だけは持つていと言うのに対し、中将のおもとは強い冷泉院のほうが少将には勝つと断言したのを受けて、少将は冷泉院との直接の対決を避けて、中将のおもとの助力を得て大君を手に入れようとする奇襲戦法に出ようとしている。

(八)あはれ知る心は人におくれねど数ならぬ身にきえつつぞふる

(蜻蛉の巻、小宰相の君)

つねなしとこころ世を見るうき身だに人の知るまで嘆きやばする

(薫)

薫に愛されていた小宰相の君は今上帝の女一の宮の侍女で、浮舟を失って悲嘆に暮れる彼に、この歌を贈って慰める。「数なら

ぬ身」とは、浮舟と比較して、自分の劣る身分のことを言っている。薫も、自分の悲しみを察してくれる彼女の誠実さに、心が癒されるのを感じている。

以上のように、『源氏物語』では、空蝉や玉鬘が源氏の愛をそれぞれ獲得していく場合のように、主に中の品の女性が高貴な男性に對して、自分を「数ならぬ身」だと卑下して詠んだ歌が多い。また、落葉の宮のように、後ろ盾となる存在を失ったり、藏人少将のように皇統から外れた身分であったりした場合に、自分が人並みでないと意識させられた場面で使われている。しかし、概して中の品の女性達は、「数ならぬ身」としての自覚を持った時点で引き下がることなく、それを踏み台にして目的に向かって進み、愛情や美貌や知性といった人間的美質によって相手の心を捉えていく。

## 五

『源氏物語』の和歌に用いられた「数ならぬ身」という歌語は、自己の置かれた状況の不遇さを嘆く心情が、一首に凝縮され純粹化されて表現されていたが、散文に使われた「数ならぬ身」という語は、自己の不遇や立場の客観的な説明として使用されている。

『源氏物語』の散文に見られる「数ならぬ身」という表現は、明石の入道のように、娘の明石の君の幸福を願って自分の取るに足りない境遇を嘆いたり(若菜上)、明石の君や玉鬘や中将の君(浮

舟の母)のように、娘の幸福を思うあまり人並みでない自分の身の上を心配したり(明石の君〔若菜上〕、玉璽〔竹河〕、中将の君〔蜻蛉〕、空蟬と源氏〔帚木〕や中の君と匂宮〔総角〕)のように、女の低い身分が高貴な男性との愛の成立の妨げとなったり、柏木と女三の宮(若菜下)や河内守と空蟬〔閨屋〕のように、男の低い身分が高い地位の女性との恋愛関係を阻害したり、源氏が六条御息所に(葵)紫の上が女三の宮に(若菜上)一条御息所が落葉の宮に(夕霧)末摘花の叔母が末摘花に(蓬生)語る時のように、相手が皇統を受け継いでいることを意識して言ったりする場合などに使われている。

「数ならぬ身」という表現は、結局物の数に入らない身分や境遇を意味しているが、『源氏物語』におけるこの語の多用は、当時の政治の世界のあり方とも結び着いている。源氏は昇進して最後は太政大臣の位に就く。今井源衛氏は、作品中に「摂政」〔閨白〕という明らかな文字はないが、<sup>〔源氏物語〕</sup>薄雲巻に見える「世の政<sup>まつりごと</sup>したまふ」の文字は、実質的に摂政の意である。」と言われ、皇統を受け継ぐ源氏の摂関就任は、「八世紀以前古代天皇制の伝統」に従うものであったとされる。<sup>〔源氏物語〕</sup>は、そのような延喜・天曆に時代をとり、中の品の女性達が自己の宿世の不遇性を昇華して、壮大な六条院の栄華の世界を築こうとする虚構性がその第一部(桐壺―藤裏葉の巻)を支配している。

## おわりに

『源氏物語』初音の巻の冒頭に、次のような記述がある。

年たちかへる朝<sup>あした</sup>の空のけしき、なごりなく曇らぬうらけさには、数ならぬ垣根<sup>かきね</sup>の内だに、雪間<sup>ゆきま</sup>の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞<sup>かすみ</sup>に木の芽<sup>め</sup>もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかに見ゆるぞかし。ましていとど玉を敷ける御前<sup>みまへ</sup>は、庭よりはじめ見どころ多く、磨<sup>みが</sup>きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。

ここでは、「数ならぬ垣根の内」の清新な情景描写は、季節の春、人生の春を謳歌する都人の住居である六条院の華麗さをより際立たせるために置かれている。一方、忠度の歌では、新春を迎えるにあたって、宿世のつたなさを嘆く自分の姿に焦点が合わせられている。

## 注

- (1) 「坂上郎女の生涯とその歌」(『青木生子著作集』第五巻「萬葉の抒情」所収)
- (2) 『和歌大辞典』(明治書院 昭和六一年三月)の「戯<sup>たは</sup>歌」の小野寛氏の解説による。
- (3) 「貧窮問答の歌―短歌をめぐって―」(『萬葉』第九三号)

昭和五一年二月

- (4) 「布衣」の不遇性については、福井重雅氏「漢代官吏登用制度の研究」(創文社)の第四章第二節「前漢における賢良・方正の特色」の中で、『史記』鄒陽列傳の例をあげて触れておられる。

(5) 『袖中抄』(『日本歌学大系』別巻二所収) 第一七

(6) 『唐詩類苑』4・『全唐詩』卷三七七五孟郊六所収

(7) 『古文真宝前集』下 卷之八所収

(8) 「中臣宅守と孝上娘子」(『万葉開眼』下)、NHK BOOKS 昭和五三年五月

(9) 『鑑賞日本古典文学』第六卷「竹取物語・宇津保物語」

(10) 「皇統の問題」(『源氏物語への招待』一九九二年 小学館)

(せら もとき 元岡山県立高校教諭)

# 研究室受贈図書雑誌目録Ⅰ

(平成十二年一月〜十二月)

## 単行本

蔵 六号(山崎勝昭)

## 雑誌・紀要

愛知淑徳大学国語国文(愛知淑徳大学国文学会)

二三

愛知大学国文学(愛知大学国文学会)

三九

青山語文(青山学院大学日本文学会)

三〇、九五、九六

岩大語文(岩手大学語文学会)

七

愛媛国文と研究(愛媛大学教育学部国語国文学会)

三三

王朝細流抄(安田女子大学大学院古代中世文学研究会) 四

王朝文学研究誌(大阪教育大学大学院古典文学研究部) 一一

大阪樟蔭女子大学論集(大阪樟蔭女子大学文学研究部) 三七

大谷女子大國文(大谷女子大学国文学会) 三〇

大妻国文(大妻女子大学国文学会) 三一

大妻女子大学紀要―文系―(大妻女子大学) 三二

大妻女子大学大学院文学研究科論集(大妻女子大学大学院文学研究科) 一〇

岡山大学国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 一四

香川大学国語研究(香川大学教育学部国語国文学研究部) 二四

学習院大学国語国文学会誌(学習院大学国語国文学会) 四三

歌子(実践女子短期大学国文学科) 八

香椎潟(福岡女子大学国文学会) 四五

活水日文(活水学院日本文学会) 三八、三九

活水論文集 日本文学科編(活水女子大学・短期大学) 四三

金沢大学語学・文学研究(金沢大学教育学部国語国文学会) 二七、二八

金沢大学国語国文(金沢大学国語国文学会) 二五

河南論集(大阪芸術大学芸術学部文芸学科研究部) 五

かほよとり(武庫川女子大学大学院文学研究科国語・国文学専攻院生研究会) 八

上林院研究(園田学園女子大学 吉村研究室) 八